



第1章 トキを野生にかえす

ほご れきし

日本のトキ保護の歴史



日本で本格的にトキを保護する動きが始まったのは、1920年代からでした。ここでは、佐渡島だけでなく、ほかの地域でのトキ保護活動も含めて、その歴史年表を見ながら、人々がトキをどのように保護しようとしてきたかについて学習しましょう。

1. 明治時代～第二次世界大戦前

明治時代の初めから中ごろまでの間に、トキは乱獲されて激減しました。新潟県でも、1926年に絶滅したと記録されましたが、1930年、佐渡島で再発見されたというニュースが流れました。1931年10月、新穂で27羽が確認され、小佐渡丘陵の東部と大佐渡の和木で二つの群れがいることがわかりました。

この時期には、能登半島でも5羽の群れが確認されています。能登半島の眉丈山（石川県羽咋市）で、17～18羽の群れが確認されました。

しかし、第二次世界大戦に突入してから、トキに関連する情報はほとんどなくなってしまっています。

年表1 明治時代～第二次世界大戦前

1892 (明治25) 年	狩猟二関スル規則で33種の保護鳥が定められるが、トキは含まれていなかった。
1908 (明治41) 年	トキが保護鳥に指定される。
1926 (大正15) 年	『新潟県天産誌』に、乱獲のためにトキが絶滅したことが記録される。
1929 (昭和4) 年	能登半島でトキ1羽が誤って殺される。石川県は一部を禁猟区指定。
1931 (昭和6) 年	佐渡島でトキが再発見される。
1934 (昭和9) 年	トキが天然記念物に指定される。
1939 (昭和14) 年	新潟県が、トキの生息調査をおこなう。

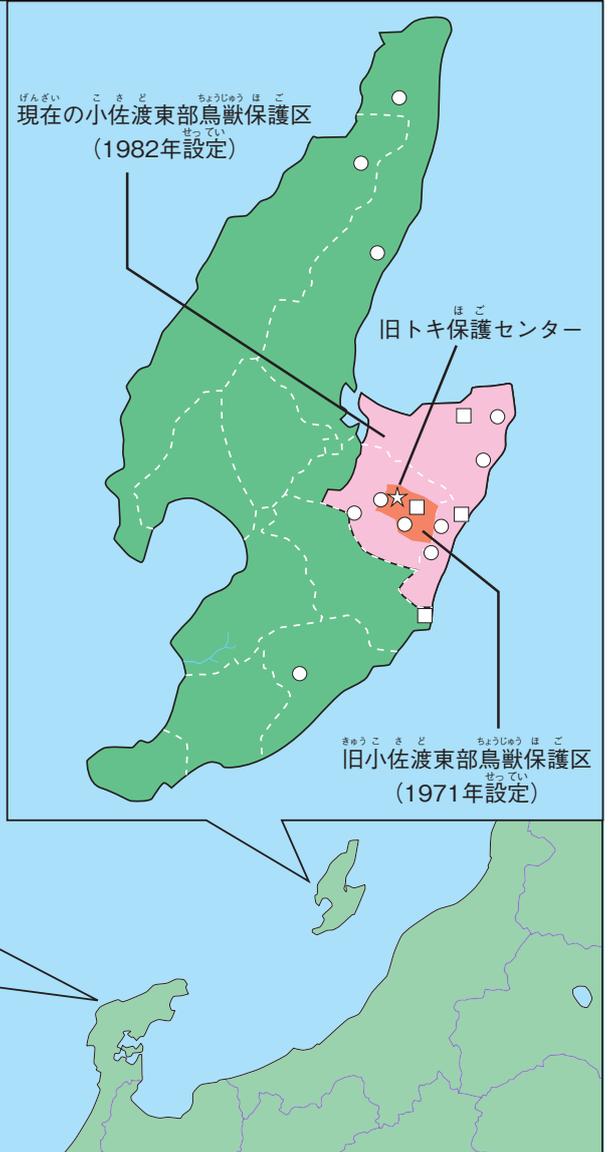
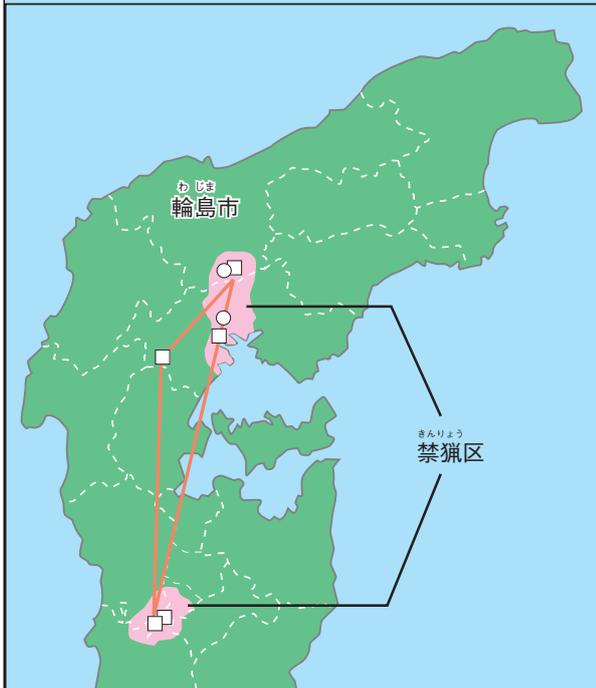
2. 第二次世界大戦後～高度経済成長期（全鳥一斉捕獲まで）

1950年代、野生のトキは佐渡島では2つの群れで24羽、能登半島では6羽が確認されていて、このときすでに絶滅寸前の状態でした。今からふり返れば、この時期が生息地の保護と、人工繁殖をおこなうことができる最後のチャンスだったといえます。戦争が終わり、人々が生活と社会をたて直すのに必死だった時期、生きものを保護する活動は後まわしにされ、世の中の人々の理解や、国や自治体の対策は十分ではありませんでした。

トキを保護しようとする人々の努力も実らず、1970年、能登半島では最後の1羽である「ノリ（能里）」が捕獲され、野生のトキは能登半島の空から姿を消しました。

さどがしま の と はんとう ぶん ぶ
佐渡島と能登半島のトキの分布

- …巣があったところ
(1931年以降)
- …生息していたところ
(1931年以降)
- …トキの移動経路



佐渡島では、トキの巣がある地域を立入禁止にして監視したり、えさになる生きものを増やす試みなどが、地元の人々の手で行われました。1960年代に入ると、佐渡島の各地で禁猟区が設定されました。1967年には、旧新穂村の清水平にトキ保護センターが建設され、飼育活動が始まりました。しかし、翌年の1968年には、3羽のトキが相次いで死亡し、保護活動は始まったとたんに関機的な状況になりました。厳しい現実の中で、スタッフや専門家グループのけん命な努力が続けられました。

年表2 第二次世界大戦後～高度経済成長期

1952 (昭和27) 年	トキが特別天然記念物に指定される。
1953 (昭和28) 年	佐渡トキ愛護会が立ち上げられる。佐渡島での本格的な保護活動の始まり。
1956 (昭和31) 年	石川県が、眉丈山を禁猟区に指定。翌年には輪島市洲衛も禁猟区に。
1960 (昭和35) 年	トキが国際保護鳥に選定される。
1962 (昭和37) 年	佐渡島で黒滝、和木を禁猟区に指定。新穂が国の禁猟区に指定される。
1967 (昭和42) 年	新穂村(当時)にトキ保護センターが建設され、「ヒロ」「フク」「フミ」の3羽の飼育が始まる。
1968 (昭和43) 年	「ヒロ」「フク」「フミ」死亡。「キン」が捕獲され、トキ保護センターで飼育が始まる。
1970 (昭和45) 年	能登半島で「ノリ」捕獲されるが、翌年死亡。能登半島のトキが絶滅。

3. 全鳥一斉捕獲～野生復帰計画まで

佐渡島の野生のトキは、1970年代後半にはわずか5羽にまで減ってしまいました。1981年、この5羽が一斉に捕獲され、トキ保護センターで飼育されることになりました。これによって、ついに野生のトキは、日本の空から姿を消すことになったのです。

保護センターでは、すでにメスの「キン」が飼育されていました。一斉に捕獲された5羽（そのうち2羽は病気にかかって死亡）の中で、オスは「ミドリ」1羽だけでした。繁殖でヒナが生まれるかどうかは、この「ミドリ」1羽の運命にかかっていました。

日本の野生トキが捕獲されたころ、中国で絶滅したと思われていたトキが再発見されました。中国では、国が中心になって強い保護活動をすすめ、日本からの技術、資金協力もあって、トキの数は大きく増えました。このあと、日本と中国は力を合わせて、トキの保護活動にあたっていくことになりました。

日本で生まれた最後のオスである「ミドリ」は、努力のいかにもなくヒナをかえらせることはできずに、1995年に死亡しました。中国から借りたり、贈られたトキは、順調にペアリングがおこなわれ、2001年には10羽を超えるヒナが生まれるまでになりました。保護と繁殖活動がすすむ中、2003年10月10日、日本で生まれた最後のトキ「キン」が、生まれてきたたぐさんのヒナを見守るように、36歳で死亡しました。トキとしては、とても長生きでした。

「キン」が死亡してわずか数ヶ月後、環境省はトキの野生復帰のための計画を改定し、「2015年までに、小佐渡東部にトキをおよそ60羽定着させる」ことを発表しました。日本のトキの野生復帰の取り組みは、この佐渡島で本格的に動き出すことになったのです。

年表3 全鳥一斉捕獲～野生復帰計画まで

1981 (昭和56) 年	佐渡島の最後の野生トキ5羽を一斉捕獲。この年、中国の陝西省洋県で、野生のトキが再発見される。
1982 (昭和57) 年	国が、小佐渡東部鳥獣保護区を設定。「ミドリ」と「シロ」のペアリングが開始される。
1983 (昭和58) 年	「シロ」が死亡。「ミドリ」と「キン」のペアリングが開始される。
1985 (昭和60) 年	中国から「ホアホア」を借りて、「キン」とのペアリングを開始する。
1993 (平成5) 年	新しいトキ保護センターが建設される。
1994 (平成6) 年	中国から「ロンロン」「フォンフォン」を借りる。「ロンロン」が12月に死亡。
1995 (平成7) 年	「ミドリ」と「フォンフォン」のペアリングが開始される。卵が六つ生まれたが、ヒナはかえらなかった。日本のトキ最後のオス「ミドリ」が死亡。
1999 (平成11) 年	中国から「ヨウヨウ」「ヤンヤン」が贈られ、飼育を開始する。2羽の卵から、人工ふ化で「ユウユウ」が誕生する。
2000 (平成12) 年	人工ふ化で「シンシン」「アイアイ」誕生。
2001 (平成13) 年	13羽のヒナが誕生する。
2002 (平成14) 年	12羽のヒナが誕生する。
2003 (平成15) 年	日本生まれの最後のトキ「キン」が死亡。
2004 (平成16) 年	自然繁殖に成功する。
2007 (平成19) 年	新穂に環境省トキ野生復帰ステーションが完成。6羽のトキが保護センターから移され、野生復帰訓練が始まる。 中国から「ホワヤン」「イースウイ」が贈られる。日本から中国に13羽を返還する。



日本の最後のオスのトキ「ミドリ」のはく製



写真提供：環境省

トキ野生復帰センターにある順化ケージ

4. 試験放鳥～最近まで

2008（平成20）年、佐渡島で飼育されているトキの数は、中国から贈られたトキのペアがヒナを誕生させてから、わずか10年足らずで、112羽までになりました。9月には、いよいよ佐渡島で育ったトキが、放鳥によって日本の空にかえってくる時をむかえます。野生復帰ステーションでは、飼育されているトキの中から15羽が選ばれ、放鳥に向けた訓練が始まりました。

9月25日、オス5羽、メス5羽の合わせて10羽のトキが、盛大な放鳥式典のもとで、実に27年ぶりに日本の空に羽ばたいていきました。これ以降、毎年1回のペース（2011年には2回）で放鳥が行われ、これまでに78羽のトキが空へ飛び立ち、このうち47羽が、佐渡島に定着して生活しています（2011年9月末現在）。

放鳥によって、トキの野生復帰の取り組みは、計画や想像の段階から、ついに実行段階に入りました。トキがふつうに生息できる環境を、わたしたちが力を合わせて再生し、まもっていくことができるのか——。いちばん大切な時期は、まさにこれからなのです。

年表4 試験放鳥～最近まで

2008（平成20）年	9月、1回目の放鳥（試験放鳥）が行われ、10羽のトキが、27年ぶりに佐渡島の空へ飛び立つ。
2009（平成21）年	9～10月、2回目の放鳥が行われ、19羽が飛び立つ。このときから、放鳥のためにつくったケージを開いておき、トキが自発的に行き出ようとするソフトリリース法が用いられる。
2010（平成22年）	トキ野生復帰ステーションの順化ケージにテングが入り、トキ9羽が殺される。原因を調べるための会議が開かれ、ケージの改修工事が行われる。11月、3回目の放鳥。この年に生まれた若い4羽を含む13羽が飛び立つ。
2011（平成23年）	3月、4回目の放鳥。18羽が飛び立つ。春～夏、7つのペアが巣をつくったが、ヒナがかえらずに終わる。9月には5回目の放鳥が行われ、18羽が飛び立つ。